

## 青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因

長 尾 博<sup>1</sup>

本研究は、青年期の自我発達上の危機状態 (ECS) に影響を及ぼす要因について明らかにするものである。研究 1 では、191名の中学、高校、大学生に対して、ECS と自我の強さ、前思春期の chum の有無 (I), 家族関係 (II), 交友関係 (III) を測定する尺度を実施した。研究 2 では、299名の中学、高校生に対して、ECS と (I), (II), (III), これらに加えてライフイベントの衝撃と幼児期の親イメージを測定する尺度を実施した。その結果の主な点は以下のとおりであった。(1)自我の強さの程度が、ECS に対してもっとも影響を及ぼす要因であることが明らかにされた。(2) Radke-Yarrow et al. (1983) のいう社会化理論, ECS に対してとくに幼児期を重視する理論は、支持された。(3)ライフイベントの衝撃度も ECS の中の不適応反応に対して影響を及ぼす要因であることが明らかにされた。

キーワード：青年期、自我発達上の危機状態、影響を及ぼす要因、社会化モデル

### 問 題

本研究は、青年期の自我発達上の危機状態に影響を及ぼす要因について明らかにするものである。長尾 (1989) は、青年期の自我発達上の危機状態を、中学生時から高校生時にかけての親子関係における独立と依存の葛藤や自我同一性 (ego identity) の確立の葛藤が生じ、交友関係も困難となつて、とくに自我の弱い者は、閉じこもりなどの非社会的行動や精神・身体的症状をとともう不適応状態を呈することもある状態と定義した。この定義は、Blos (1962), Erikson (1959), Loevinger (1976) の自我発達論を参考にしたものである。つまり、青年期において、いかにして親から分離—個体化を果たしていき (Blos, 1962), 自分なりの価値観を形成し (Loevinger, 1976), 自我同一性を確立していくか (Erikson, 1959) という危機状況を包括している。この定義の特徴として、これまでの青年期危機 (adolescence crisis) 概念を整理して自我の発達 (development) という視点からとらえる発達心理学的観点と、適応 (adjustment) という視点からとらえる臨床心理学的観点との

2 点から構築していることがあげられる。また、長尾 (1989) は、この定義にもとづいて、主に青年期の自我同一性や親子関係上の葛藤を測定する A 水準項目 (問題内省水準：5 件法で 26 項目) と不適応状態を測定する B 水準項目 (問題自覚水準：3 件法で 24 項目) とで構成される質問紙尺度を作成した<sup>2</sup>。この尺度は、A 水準項目を 1 点から 5 点までの 5 件法で得点化し、B 水準項目を 1 点から 3 点までの 3 件法で得点化しており、得点が高いほど危機状態が高いととらえるようになっている。この尺度の信頼性については、長尾 (1995) の研究から再検査法によって尺度の安定性が、また折半法によって尺度の内的—一貫性が検証されている。また、この尺度の併存的妥当性については、長尾 (1992) の研究から登校拒否や緘黙などの非社会的行動を示す青年に対しては検証されたが、暴力、暴走、窃盗などの反社会的行動を示す青年に対しては検証されなかった。さらに内容的妥当性については、長尾 (1993) による健常中学生に対するバウム・テスト、及び健常大学生に対するロールシャッハテストの結果から検証されている。また、長尾 (1996) の青年期の自我発達上の危機状態の学年差と性差に関する研究から、中学生時と高校生時においてももっとも危機状態が高まり、大学生時においては危機状態が低減することが明らかにされている。そこで本研究の調査対象を主に健常中学生と高校生に絞ることにした。

Reiter & Strotzka (1977) は、ヒトが危機状態に陥る規定要因として、(1)自我の強さ (ego strength) の程度、(2)ライフイベント (life events) の有無、(3)現在の家族関係のあり方、とくに家族の凝集性 (cohesion) の程

<sup>1</sup> 活水女子大学文学部

<sup>2</sup> 問題内省水準とは、九州大学教育学部心理教育相談室へ来談した青年期の自我発達上の危機状態にいと診断されたクライアントの治療過程で明らかになった親子関係や自我同一性の葛藤内容である。また、問題自覚水準とは、同様のクライアントが来談当初に表現した症状や問題行動の内容である。長尾 (1989) の中学・高校・大学生 279 名を対象とした研究結果から、A 水準得点と B 水準得点との相関係数は  $r = .57$  ( $p < .01$ ) であった。

度、(4)現在の親子関係のあり方、とくに親が子どもに対して支持(support)する程度、(5)過去から現在までの交友関係のあり方の5要因をあげている。青年期の自我発達上の危機状態に関してこれら5要因のうちでどの要因が危機状態にもっとも影響を及ぼしているのであろうか。これまでの青年期の自我発達や適応に関する研究では、自我同一性や精神的健康度(mental health)と各要因ごとの関係を取りあげたものは多くある(たとえば、精神的健康度と家族及び友人サポートとの関係; 福岡・橋本, 1995, 交友関係と自我同一性との関係; Orlofsky, Marcia & Lesser, 1973, 自我の強さの程度と自我同一性; 田端, 1981 など)。しかし、これら5要因すべてを取りあげて、どの要因がもっとも影響を及ぼしているのかを明らかにした研究はない。HartmannやEriksonなどに代表される精神分析学派的自我心理学(ego psychology)的見地に立つ臨床家は、これら5要因のうちで自我の強さの程度をもっとも重視している。筆者の臨床経験からも健常青年と比較して臨床現場で関わる青年のほうが自我の強さの程度が弱いことがとらえられた。

臨床現場で青年期クライアントと関わる際、自我の強さの程度という視点も重要であるが、その青年の自我の発達程度をとらえておくことも重要である。一般に青年期の自我発達をとらえていく場合、親子関係のあり方を重視するか、それとも交友関係のあり方を重視するかの2つの見解がある。Cooper & Lopez (1985)は、これまでの青年期の自我発達に関する親子関係と交友関係理論をまとめて、次の3点をあげている。(1)拮抗力(cross-pressure)理論、つまり青年期の親子関係と交友関係とは拮抗し、親子関係上で葛藤が生じた青年は、交友関係を重視しやすいというもの(Brittain, 1963 など)。この理論は、幼児期の親子関係のあり方を自我発達の観点に入れず、現在の親子関係と交友関係のあり方を重視している。(2)二つの世界(two-worlds)理論、Sullivan (1953)に代表される理論で親子関係と交友関係の内容は、別個であり、前者は上下の関係、後者は対等の関係であるにとらえるもの。この理論は、とくに交友関係が活発となる前思春期(pre-adolescence)を重視している。(3)社会化(socialization)理論、つまり乳幼児期からの親子関係を社会化の基盤にとらえ、この時期の親子の情緒的結合が交友関係上の社会化へと展開していくにとらえるもの(Radke-Yarrow, Zahn-Waxler & Chapman, 1983 など)。青年期の自我発達上の危機状態をとらえていく際、この3つの理論のうちでどの理論が自我発達をよりよく説明できる理論であろうか。青年期の自我発達上の危機状態に影

響を及ぼしている要因を明らかにしていくことは、学校現場において教育指導を行ううえでも、また臨床現場においてどのような点に着目して治療をしていくかを定めていくうえでも意義あることと思われる。

本研究の目的は、次の2点があげられる。主に健常中学生と高校生を対象に、青年期の自我発達上の危機状態に関して、(1)Reiter & Strotzka (1977)の危機状態を規定する要因の自我の強さの程度、現在の家族関係のあり方と交友関係のあり方と前思春期のchum(親友)の有無の4要因のうちでどの要因がもっとも危機状態に影響を及ぼしているのかについて明らかにする。(2)青年期の親子関係と交友関係に関する拮抗力理論、二つの世界理論、社会化理論の中で青年期の自我発達上の危機状態を説明できる理論を検討する。

## 研究 1

1 目的 既述したReiter & Strotzka (1977)の危機状態を規定する5要因を参考に、筆者の臨床経験にもとづいて3要因、すなわち(1)自我の強さの程度、(2)現在の交友関係のあり方、(3)現在の家族関係のあり方と、長尾(1997)の研究から青年期の自我発達上の危機状態に対してSullivan (1953)のいう前思春期のchumの有無が影響を与えていることが明らかにされていることから、(4)前思春期のchumの有無を加えて、これらの4要因のうち、青年期の自我発達上の危機状態に対してどの要因がもっとも影響を及ぼしているのかについて明らかにする。

## 2 方法

調査対象; 長崎県の私立女子中学校1年生53名、県立高校普通科2年生65名(男子30名と女子35名)、私立女子短期大学2年生15名、宮崎県の私立女子高校普通科2年生58名、合計191名。

手続き; (1)長尾(1989)による青年期の自我発達上の危機状態尺度を、また、以下の(2)、(3)、(5)の尺度は、臨床現場でよく用いられることからこれらの尺度を選択した。(2)自我の強さの程度をとらえるためにBaron (1953)の自我強度尺度を用いた。この尺度は、本来、7つの下位尺度で構成されているが「精神衰弱」下位尺度は青年期の自我発達上の危機状態の下位尺度と内容が重複することから除外した。また「宗教的態度」下位尺度もわが国の青年の場合、宗教的態度が一貫していないにとらえて除外した。したがって5つの下位尺度で構成し、各4項目で合計20項目の質問内容を選出した。これら20項目は、(1)の尺度の質問内容とは重複していないことも確認した。「はい」の回答を3

点,「わからない」の回答を2点,「いいえ」の回答を1点と得点化し,得点が高いほど自我の強さが弱いととらえるようにした。また,この尺度の信頼性については,Barron (1953)の研究結果から検証されており,妥当性についても小川 (1965)の研究結果から検証されている。(3)前思春期のchumの有無をとらえるためにMannarino (1976)がSullivanの理論にもとづいて作成したchum checklistに筆者が日本の児童にふさわしいように修正を加えた尺度を用いた。この尺度は,10項目からなり,小学6年生時を回顧させて質問項目に該当する友人がいた場合を3点,いなかった場合を1点,わからないと回答した場合を2点として得点化した。(4)現在の交友関係のあり方をとらえるために筆者による臨床経験にもとづいて上野・上瀬・松井・福富 (1994)による同調と心理的距離測定尺度,工藤・西川 (1983)による孤独感尺度,久田・千田・箕口 (1989)によるソーシャル・サポート尺度,Bracken (1993)による対人関係尺度の質問項目を参考にして26質問項目の交友関係尺度を作成した。その評定は,「はい」を3点,「わからない」を2点,「いいえ」を1点と得点化して高得点ほど交友関係が密であり,活発であるのととらえるようにした。(5)現在の家族関係のあり方をとらえるためにOlson, Portner & Lavee (1985)によるFACES-III (Family Adaptation and Cohesion Evaluation Scale- Third Revision)を用いた。この尺度は,家族の凝集性(cohesion),つまり家族のまとまりの程度と家族の適応性(adaptability),つまり家族の問題対処能力の柔軟さの程度の2つの下位項目群からなり,各10個の質問項目で構成されている。その評定は,「いつもそうである」の5点から「決してそんなことはない」の1点までの5件法で得点化した。また,この尺度は貞木・榎野・岡田 (1992)の研究から臨床現場で適用できることが明らかにされている。

**調査時期**；1995年7月に各学校各クラスで一斉に実施した。

### 3 結果と考察

研究1の5尺度の各群ごとの平均値と青年期の自我発達上の危機状態尺度得点とその他の尺度得点との相関係数をまとめたものがTABLE 1である。TABLE 1の全体の相関係数を見ると危機状態A水準得点と各尺度得点との相関係数は,自我強度得点,前思春期のchum得点,交友関係得点,家族関係の凝集性得点,それぞれほぼ同程度の値を示していることがわかる。一方,危機状態B水準得点は,自我強度得点のみと有意な相関関係を示していることがわかる。このことから,青

年期の自我発達上の危機状態のうち,とくに親子関係上の葛藤や自我同一性の葛藤などの青年期の発達の葛藤に対して自我の強さの程度や前思春期から青年期にかけての交友関係のあり方,家族の凝集性が影響を及ぼしていること,また,青年期の不適応状態には,自我の強さの程度が影響を及ぼしていることがとらえられた。また,各群ごとに相関係数を見ていくと,高校生の場合,男子は自我強度得点のみが有意な相関を示しているが,女子は前思春期のchum得点,現在の交友関係得点も有意な相関を示していることがわかる。このことから,高校生女子の危機状態に対する交友関係のあり方の影響度がとらえられた。また,女子の場合の中学・高校・大学の各群の相関係数を見ると高校生のほうが中学生よりも交友関係得点の相関係数が高く,大学生の場合は自我強度得点のみが有意な相関を示していることがわかる。このことから,中学生時から高校生時にかけての危機状態には交友関係のあり方の影響度が大きくなり,大学生時になると個人のもつ自我の強さの程度が危機状態に影響を与えていることが示唆された。しかし,どの要因が危機状態に対してもっとも影響を及ぼしているのかについては明らかでない。そこで青年期の自我発達上の危機状態に対してこれら4つの尺度得点のうちどの尺度得点をもっとも影響を及ぼしているのかを明らかにするために,危機状態尺度得点を基準変数として,各4つの尺度得点を予測変数とした重回帰分析を行い,重回帰係数,及び標準偏回帰係数を算出した。その結果を各群別にまとめたものがTABLE 2である。各群各尺度の標準偏回帰係数の比較を行うと,自我強度得点の場合がもっとも標準偏回帰係数が高いことがわかる。このことから,これら4要因のうちで青年期の自我発達上の危機状態に対して自我の強さの程度がもっとも強く影響を及ぼしていることが明らかにされた。この結果から学校現場においては生徒のもつ自我の強さの程度という視点を考慮して関わっていく必要性や,臨床現場においては青年期の自我発達上の危機状態にいるクライアントに対して治療を行う際,自我心理学的見地に立つ臨床家がいうようにクライアントの自我を支えることが重要であることが示唆された。

## 研究 2

**1 目的** 既述したCooper & Lopez (1985)による青年期の自我発達に関する親子関係のあり方と交友関係のあり方の理論の総括にもとづき,拮抗力理論,二つの世界理論,社会化理論のうちで青年期の自我発達上

TABLE 1 各尺度の平均値と青年期の自我発達上の危機状態尺度得点との相関係数

| 対象<br>尺度          | 中学生女子<br>N=53 |        |         | 高校生男子<br>N=30 |        |         | 高校生女子<br>N=93 |        |         | 大学生女子<br>N=15 |        |         | 全 体<br>N=191 |        |         |
|-------------------|---------------|--------|---------|---------------|--------|---------|---------------|--------|---------|---------------|--------|---------|--------------|--------|---------|
| 危機<br>状態          | A水準           | 75.28  | (11.64) | A水準           | 81.71  | (14.99) | A水準           | 81.55  | (12.49) | A水準           | 75.87  | (15.82) | A水準          | 79.33  | (13.21) |
|                   | B水準           | 40.45  | (9.31)  | B水準           | 39.71  | (7.03)  | B水準           | 41.59  | (7.89)  | B水準           | 37.53  | (8.58)  | B水準          | 40.65  | (8.26)  |
|                   | 総得点           | 115.71 | (17.64) | 総得点           | 121.47 | (20.14) | 総得点           | 123.02 | (17.39) | 総得点           | 113.40 | (23.18) | 総得点          | 119.92 | (18.63) |
| 自 我<br>強 度        | $\bar{x}$     | 38.94  | (7.16)  | $\bar{x}$     | 35.41  | (4.20)  | $\bar{x}$     | 36.92  | (4.89)  | $\bar{x}$     | 35.66  | (3.77)  | $\bar{x}$    | 37.15  | (5.58)  |
|                   |               | **     |         |               | **     |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | A水準           | .41    |         | A水準           | .51    |         | A水準           | .33    |         | A水準           | .74    |         | A水準          | .34    |         |
|                   |               | **     |         |               | **     |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | B水準           | .49    |         | B水準           | .54    |         | B水準           | .50    |         | B水準           | .67    |         | B水準          | .49    |         |
| 前思春期<br>の<br>chum |               | **     |         |               | **     |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | 総得点           | .53    |         | 総得点           | .57    |         | 総得点           | .46    |         | 総得点           | .76    |         | 総得点          | .46    |         |
|                   | $\bar{x}$     | 26.68  | (2.93)  | $\bar{x}$     | 21.72  | (4.61)  | $\bar{x}$     | 24.37  | (4.19)  | $\bar{x}$     | 24.67  | (3.81)  | $\bar{x}$    | 24.62  | (4.21)  |
|                   |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               |        |         |              | **     |         |
|                   | A水準           | -.24   |         | A水準           | -.27   |         | A水準           | -.40   |         | A水準           | -.13   |         | A水準          | -.34   |         |
| 交 友<br>関 係        |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               |        |         |              | **     |         |
|                   | B水準           | .06    |         | B水準           | -.04   |         | B水準           | -.14   |         | B水準           | -.04   |         | B水準          | -.04   |         |
|                   |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               |        |         |              | **     |         |
|                   | 総得点           | -.13   |         | 総得点           | -.21   |         | 総得点           | -.34   |         | 総得点           | -.11   |         | 総得点          | -.26   |         |
|                   |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               |        |         |              | **     |         |
| 交 友<br>関 係        | $\bar{x}$     | 62.60  | (7.52)  | $\bar{x}$     | 55.38  | (8.49)  | $\bar{x}$     | 59.54  | (8.22)  | $\bar{x}$     | 63.73  | (7.23)  | $\bar{x}$    | 60.03  | (8.35)  |
|                   |               | *      |         |               |        |         |               | **     |         |               |        |         |              | **     |         |
|                   | A水準           | -.27   |         | A水準           | .04    |         | A水準           | -.37   |         | A水準           | -.12   |         | A水準          | -.28   |         |
|                   |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               |        |         |              | **     |         |
|                   | B水準           | .15    |         | B水準           | -.09   |         | B水準           | -.17   |         | B水準           | -.25   |         | B水準          | -.07   |         |
| 家 族<br>関 係        |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               |        |         |              | **     |         |
|                   | 総得点           | -.10   |         | 総得点           | -.01   |         | 総得点           | -.35   |         | 総得点           | -.17   |         | 総得点          | -.23   |         |
|                   |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               |        |         |              | **     |         |
|                   | 凝集性           |        |         | 凝集性           |        |         | 凝集性           |        |         | 凝集性           |        |         | 凝集性          |        |         |
|                   | 適応性           |        |         | 適応性           |        |         | 適応性           |        |         | 適応性           |        |         | 適応性          |        |         |
| 家 族<br>関 係        | $\bar{x}$     | 33.93  | (8.19)  | $\bar{x}$     | 27.86  | (6.51)  | $\bar{x}$     | 29.16  | (7.41)  | $\bar{x}$     | 23.50  | (7.05)  | $\bar{x}$    | 32.35  | (10.12) |
|                   |               | *      |         |               |        |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | A水準           | -.31   |         | A水準           | -.21   |         | A水準           | .08    |         | A水準           | .32    |         | A水準          | .26    |         |
|                   |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | B水準           | -.09   |         | B水準           | .22    |         | B水準           | .01    |         | B水準           | .06    |         | B水準          | .12    |         |
| 家 族<br>関 係        |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | 総得点           | -.25   |         | 総得点           | -.02   |         | 総得点           | .06    |         | 総得点           | .06    |         | 総得点          | -.01   |         |
|                   |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | 凝集性           |        |         | 凝集性           |        |         | 凝集性           |        |         | 凝集性           |        |         | 凝集性          |        |         |
|                   | 適応性           |        |         | 適応性           |        |         | 適応性           |        |         | 適応性           |        |         | 適応性          |        |         |
| 家 族<br>関 係        | $\bar{x}$     | 33.93  | (8.19)  | $\bar{x}$     | 27.86  | (6.51)  | $\bar{x}$     | 29.16  | (7.41)  | $\bar{x}$     | 23.50  | (7.05)  | $\bar{x}$    | 32.35  | (10.12) |
|                   |               | *      |         |               |        |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | A水準           | -.31   |         | A水準           | -.21   |         | A水準           | .08    |         | A水準           | .32    |         | A水準          | .26    |         |
|                   |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | B水準           | -.09   |         | B水準           | .22    |         | B水準           | .01    |         | B水準           | .06    |         | B水準          | .12    |         |
| 家 族<br>関 係        |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | 総得点           | -.25   |         | 総得点           | -.02   |         | 総得点           | .06    |         | 総得点           | .06    |         | 総得点          | -.01   |         |
|                   |               |        |         |               |        |         |               | **     |         |               | **     |         |              | **     |         |
|                   | 凝集性           |        |         | 凝集性           |        |         | 凝集性           |        |         | 凝集性           |        |         | 凝集性          |        |         |
|                   | 適応性           |        |         | 適応性           |        |         | 適応性           |        |         | 適応性           |        |         | 適応性          |        |         |

\* p&lt;.05    \*\* p&lt;.01

( )内の数値は標準偏差値を示す。

TABLE 2 危機状態尺度得点を基準変数とした重回帰分析における標準偏回帰係数と重相関係数

| 対 象              | 中学生女子 N=53 |           |      | 高校生男子 N=30 |           |      | 高校生女子 N=93 |           |      | 大学生女子 N=15 |           |      | 全 体 N=191 |           |      |
|------------------|------------|-----------|------|------------|-----------|------|------------|-----------|------|------------|-----------|------|-----------|-----------|------|
| 基準変数             | A水準<br>得点  | B水準<br>得点 | 総得点  | A水準<br>得点  | B水準<br>得点 | 総得点  | A水準<br>得点  | B水準<br>得点 | 総得点  | A水準<br>得点  | B水準<br>得点 | 総得点  | A水準<br>得点 | B水準<br>得点 | 総得点  |
| 自我強度得点           |            | **        | **   | *          | **        | **   | **         | **        | **   | **         | **        | **   | **        | **        | **   |
|                  | .14        | .55       | .53  | .40        | .52       | .49  | .29        | .48       | .44  | .80        | .71       | .80  | .17       | .50       | .47  |
| 家族関係得点           |            |           |      |            |           |      |            |           |      |            |           |      |           |           |      |
|                  | .19        | .13       | -.02 | .29        | .08       | .25  | -.08       | .03       | -.04 | -.10       | .28       | .06  | .12       | .07       | .02  |
| 前思春期の<br>chum 得点 |            |           |      |            |           |      |            |           |      |            |           |      |           |           | **   |
|                  | .02        | -.12      | -.11 | -.29       | .05       | -.21 | -.19       | -.02      | -.14 | -.49       | -.29      | -.45 | -.05      | -.06      | -.20 |
| 交友関係得点           |            |           |      |            |           |      | *          |           | *    |            |           |      |           |           |      |
|                  | -.03       | .22       | -.02 | -.22       | -.23      | -.25 | -.23       | -.12      | -.24 | .25        | -.11      | .13  | -.05      | -.06      | -.17 |
| 重相関係数            |            | **        | **   | *          | *         | **   | **         | **        | **   | **         | *         | **   |           | **        | **   |
|                  | .25        | .56       | .55  | .57        | .57       | .61  | .53        | .51       | .58  | .82        | .73       | .81  | .20       | .51       | .55  |

\* p&lt;.05    \*\* p&lt;.01

家族関係得点は、合計得点を予測変数とした。

の危機状態をどの理論が説明できるのかを検討する。  
その検討の前提として、青年期の自我発達上の危機状

態尺度得点と他の尺度得点との相関係数を各理論の説  
明のための指標にとらえた。また、鈴木 (1985) が、わ

が国の青年期の親子関係のあり方とらえていく場合、母親と子どもという1対1の関係のあり方を見るよりも家族成員全員との関係のあり方を見ることの方が重要であることを示唆していることを参考にして、親子関係を家族関係からとらえてみることにした。拮抗力理論が危機状態を説明できる場合には危機状態と幼児

期の親子関係のあり方とは強い相関はなく、現在の家族関係かあるいは現在の交友関係と強い相関をもつであろう。また二つの世界理論が危機状態を説明できる場合には、Sullivan (1953) の理論を参考にすると同思春期のchumの有無が危機状態と強い相関をもつであろう。また社会化理論が危機状態を説明できる場合に

TABLE 3 各尺度の平均値

| 尺度                | 対象  | 中学生男子<br>N=40 | 中学生女子<br>N=35 | 高校生男子<br>N=50 | 高校生女子<br>N=30 | 全体<br>N=299   |
|-------------------|-----|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 危機状態              | A水準 | 79.18(12.33)  | 79.64(12.01)  | 80.21(13.23)  | 77.91(10.98)  | 78.60(12.47)  |
|                   | B水準 | 40.55 (7.86)  | 42.45 (8.88)  | 41.29 (8.48)  | 40.85 (6.71)  | 41.09 (8.11)  |
|                   | 総得点 | 119.74(17.77) | 122.08(17.78) | 121.50(18.25) | 118.76(15.73) | 119.69(17.91) |
| life change units |     | 3.55(3.77)    | 5.97(6.05)    | 4.09(4.64)    | 4.57(5.99)    | 3.75(4.67)    |
| 幼児期の親のイメージ        | 支持  | 2.27(1.96)    | 2.60(1.62)    | 2.56(2.05)    | 2.76(2.09)    | 2.59(2.01)    |
|                   | 不安定 | -0.13(2.05)   | 0.05(1.76)    | 1.01(2.09)    | 0.68(2.33)    | 0.38(2.09)    |
|                   | 支配  | -0.85(1.83)   | -0.99(1.89)   | -1.22(2.23)   | -2.18(2.41)   | -1.06(2.23)   |
| 家族関係              | 凝集性 | 31.54(7.55)   | 32.55(8.36)   | 30.13(7.58)   | 32.56(8.82)   | 31.48(8.27)   |
|                   | 適応性 | 25.91(6.59)   | 27.23(6.54)   | 24.73(6.97)   | 26.82(6.55)   | 25.71(6.59)   |
|                   | 合計  | 57.45(12.08)  | 59.78(13.22)  | 54.86(12.47)  | 59.38(13.44)  | 57.19(12.65)  |
| 前思春期のchum         |     | 22.48(4.82)   | 24.90(3.77)   | 23.40(3.76)   | 24.24(4.35)   | 23.72(4.30)   |
| 交友関係              |     | 60.33(7.99)   | 62.68(6.42)   | 59.55(7.35)   | 59.65(7.27)   | 59.81(7.33)   |

( )内の数値は、標準偏差値を示す。幼児期の親イメージ尺度は、父親に対してと母親に対しての合計得点とした。

TABLE 4 危機状態尺度得点との相関係数

| 対象                   | 中学生男子  | 中学生女子 | 高校生男子 | 高校生女子 | 全体   | 中学生男子  | 中学生女子 | 高校生男子 | 高校生女子 | 全体   | 中学生男子    | 中学生女子 | 高校生男子 | 高校生女子 | 全体   |
|----------------------|--------|-------|-------|-------|------|--------|-------|-------|-------|------|----------|-------|-------|-------|------|
| 危機状態各尺度              | A水準 得点 |       |       |       |      | B水準 得点 |       |       |       |      | 危機状態 総得点 |       |       |       |      |
| 幼児期の (支持)            | -.24   | *     | -.17  | -.19  | **   | -.20   | -.09  | -.16  | -.16  | **   | *        | -.21  | -.20  | -.20  | **   |
| 親イメージ(不安定)           | .18    | .02   | **    | .06   | **   | .13    | -.04  | .29   | .10   | **   | .19      | -.01  | .40   | .08   | **   |
| 得点 (支配)              | .09    | .22   | -.02  | .17   | .08  | .11    | .41   | .18   | .18   | **   | .11      | .35   | .07   | .02   | **   |
| life change units 得点 | *      | .32   | -.01  | .07   | *    | *      | -.06  | .29   | .05   | **   | *        | -.03  | .19   | -.17  | **   |
| 家族 (凝集性)             | **     | **    | -.12  | .06   | **   | **     | -.35  | -.01  | .05   | **   | **       | -.45  | -.09  | .06   | **   |
| 関係 (適応性)             | -.41   | -.41  | .03   | -.02  | -.23 | -.07   | -.07  | .24   | .02   | -.28 | -.06     | -.16  | .13   | -.01  | -.29 |
| 得点 (合計)              | *      | **    | -.06  | .03   | **   | *      | -.26  | .13   | .04   | **   | **       | -.36  | .02   | .04   | **   |
| 前思春期のchum 得点         | -.28   | -.34  |       |       | -.16 | -.35   | -.07  |       |       | -.17 | -.35     |       |       |       | -.19 |
| 交友関係 得点              | -.16   | -.11  | -.05  | .05   | *    | -.14   | -.15  | -.07  | -.11  | -.09 | -.17     | -.15  | -.07  | -.02  | *    |
|                      | -.08   | **    | **    | -.19  | **   | .10    | -.28  | -.30  | -.02  | *    | -.01     | **    | **    | .12   | **   |

幼児期の親のイメージ尺度は、父親に対してと母親に対しての合計得点とした。

\* p<.05 \*\* p<.01

TABLE 5 危機状態尺度得点を基準変数とした重回帰分析における標準偏回帰係数と重相関係数

| 対 象                     | 中学生 男子 N=40 | 中学生 女子 N=35 | 高校生 男子 N=50 | 高校生 女子 N=30 | 全 体 N=299 |      |           |           |      |           |           |      |           |           |      |
|-------------------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-----------|------|-----------|-----------|------|-----------|-----------|------|-----------|-----------|------|
| 基準変数                    | A水準<br>得点   | B水準<br>得点   | 総得点         | A水準<br>得点   | B水準<br>得点 | 総得点  | A水準<br>得点 | B水準<br>得点 | 総得点  | A水準<br>得点 | B水準<br>得点 | 総得点  | A水準<br>得点 | B水準<br>得点 | 総得点  |
| 予測変数                    |             |             |             |             |           |      |           |           |      |           |           |      |           |           |      |
| 幼児期の (支持)               | -.19        | -.02        | -.16        | -.23        | -.04      | -.17 | -.12      | -.24      | -.20 | -.21      | -.22      | -.24 | *         | **        | **   |
| 親イメージ(不安定)              | .07         | -.03        | .04         | .06         | -.06      | .01  | .41       | .38       | .48  | -.14      | .11       | -.06 | .14       | .12       | .16  |
| 得点 (支配)                 | -.05        | -.08        | -.06        | -.02        | .33       | .17  | .03       | .21       | .12  | .02       | .25       | .12  | .05       | .18       | .11  |
| life change units<br>得点 | .32         | .31         | *           | .11         | -.03      | .05  | -.01      | .29       | .14  | -.37      | .05       | -.26 | .13       | .20       | .18  |
|                         |             |             | *           |             |           |      |           |           |      | *         |           |      |           | **        | **   |
|                         | .29         | .31         | .33         | .11         | -.02      | .05  | -.03      | .28       | .13  | .43       | .05       | -.29 | .11       | .18       | .16  |
|                         |             |             | *           |             |           |      |           |           |      |           |           |      | *         | **        | **   |
|                         | .31         | .32         | .35         | .12         | -.04      | .05  | -.02      | .21       | .09  | -.37      | .12       | -.23 | .13       | .20       | .18  |
| 家 族 関 係 得点              | -.15        | *           | -.25        | -.22        | -.22      | -.27 | -.01      | .27       | .13  | -.07      | .09       | -.01 | -.06      | -.08      | -.08 |
|                         |             | *           |             |             |           |      |           | *         |      |           |           |      |           |           |      |
|                         | -.22        | -.37        | -.31        | -.26        | -.24      | -.31 | .07       | .31       | .21  | -.22      | .05       | -.14 | -.09      | -.11      | -.11 |
|                         |             | *           | *           |             |           |      |           |           |      |           |           |      | *         | *         | *    |
|                         | -.26        | -.38        | -.35        | -.28        | -.24      | -.32 | -.05      | .23       | .07  | -.17      | .04       | -.11 | -.13      | -.11      | -.14 |
| 前思春期の chum<br>得点        | -.01        | -.06        | -.03        | .22         | -.03      | .11  | .07       | -.01      | .05  | -.28      | -.07      | -.24 | .02       | .01       | .01  |
|                         | -.02        | -.05        | -.04        | .21         | -.05      | .09  | .07       | -.04      | .03  | -.31      | -.03      | -.24 | .01       | -.01      | .01  |
|                         | -.01        | -.04        | -.02        | .20         | -.07      | .08  | .04       | -.01      | .03  | -.28      | -.07      | -.23 | .01       | -.01      | -.01 |
| 交 友 関 係 得点              | -.01        | .27         | .11         | **          | -.18      | *    | **        |           | **   | *         |           |      | **        |           | **   |
|                         |             |             |             | **          |           | *    | **        | **        | **   | *         |           |      | **        |           | **   |
|                         | .05         | .29         | .17         | -.47        | -.15      | -.38 | -.45      | -.27      | -.47 | -.39      | -.02      | .28  | -.18      | -.10      | -.18 |
|                         |             |             |             | **          |           |      | **        | *         | **   |           |           |      | **        |           | **   |
|                         | .06         | .30         | .18         | -.45        | -.03      | -.31 | -.41      | -.29      | -.43 | -.36      | -.01      | .26  | -.17      | -.10      | -.17 |
| 重 相 関 係 数               | .45         | *           | *           | **          |           | *    | *         | *         | *    | .48       | .24       | .39  | **        | **        | **   |
|                         |             | *           | *           | *           | .36       | .56  | .44       | .47       | .49  |           |           |      | **        | *         | **   |
|                         | .42         | .51         | .49         | .58         | .36       | .54  | .56       | .54       | .62  | .46       | .16       | .33  | .31       | .30       | .34  |
|                         |             | *           | *           | *           |           | *    |           | *         | *    |           |           |      | **        | **        | **   |
|                         | .41         | .51         | .49         | .58         | .47       | .56  | .42       | .46       | .47  | .44       | .28       | .35  | .28       | .32       | .32  |

幼児期の親イメージ尺度は、父親に対してと母親に対しての合計得点を予測変数とした。上欄の数値は、幼児期の親イメージ尺度を支持の場合、中欄の数値は、不安定の場合、下欄の数値は、支配の場合を予測変数とした偏回帰係数、及び重相関係数を示す。家族関係得点は、合計得点を予測変数とした。

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$

は、幼児期の親子関係のあり方と現在の交友関係のあり方との2要因が危機状態と強い相関をもつであろうとした。

## 2 方法

**調査対象**；長崎県の公立中学校2年生75名(男子40名と女子35名)、県立A高校普通科2年生80名(男子50名と女子30名)、県立B高校普通科2年生144名(調査の都合上、男女の区別を記入できなかった)、合計299名。

**手続き**；青年期の自我発達上の危機状態、現在の家族関係のあり方、前思春期のchumの有無、現在の交友関係のあり方をとらえる尺度として研究1で用いた尺度を実施した。さらに研究2では、研究1と同様に

臨床現場での適用を考慮して尺度を選択した。その1つとして、最近1年間で生じたライフイベントの有無をとらえるためにCoddington(1972)による青年期用生活変化単位(life change units)項目の有無を問い、その心的負荷の総和を算出する尺度を用いた。この尺度は、11個のライフイベントの有無を問い、各項目はlife change units 数が定められており、その総和を得点化するものである。この尺度は、上林・中田・藤井ら(1989)の研究からわが国の中学生・高校生にも適用できることが検証されている。また、幼児期の親に対するイメージをとらえるために幼稚園の頃を回顧させた宮下(1991)による親の養育態度尺度を用いた。この尺度

は、父親と母親別に親の「情緒的支持」,「情緒的不安定」,「支配・介入」の3つの下位項目で構成されており、各下位項目ごとに3つの形容詞対を提示してあてはまるイメージを回顧させるものである。その評定は、-2点から+2点までの5件法で得点化した。

**調査時期**；1996年10月に各学校各クラスで一斉に実施した。

### 3 結果と考察

#### (1)標準偏回帰係数からとらえた理論の検討

研究2の各群別に6尺度の平均値をまとめたものがTABLE 3である。TABLE 3の結果をもとに青年期の自我発達上の危機状態尺度得点とその他の尺度得点との相関係数をまとめたものがTABLE 4である。TABLE 4の全体(N=299)の危機状態総得点とその他の尺度得点との相関係数を見ると、幼児期の親イメージ得点、家族関係得点、交友関係得点、life change units得点、前思春期のchum得点の順で危機状態総得点との相関係数が高いことがわかる。このことから、青年期の自我発達上の危機状態には、幼児期の親子関係、現在の家族関係、そして現在の交友関係へと過去から現在までの自我の社会化の発達が大きな影響を与えていることがとらえられた。

また各群別に相関係数を見ていくと、中学生男子の場合、危機状態A水準得点は、家族関係得点とで有意な相関が認められ、高校生男子の場合では交友関係得点と有意な相関が認められる。このことから、男子においてはBlyth, Hill & Thiel (1982)の研究結果と同様に中学生の場合には家族関係のほうが交友関係よりも自我発達上の重要な他者(significant others)であること、また高校生になると交友関係のほうが家族関係よりも自我発達上において影響を及ぼしていることが示唆された。

しかし、TABLE 4の結果からだけでは青年期の自我発達上の危機状態を説明できる理論は、既述した3つの理論のうち、どの理論がよりよく説明できるかについては明らかではない。そこで青年期の自我発達上の危機状態に対してこれら5つの尺度得点のうちでどの尺度得点が強く影響を及ぼしているのかを明らかにし、青年期の自我発達上の危機状態を説明できる理論を検討したい。危機状態尺度得点を基準変数として、各5つの尺度得点を予測変数とした重回帰分析を行い、重相関係数、及び標準偏回帰係数を算出した結果はTABLE 5のとおりである。既述したように青年期の自我発達上の危機状態A水準得点は、青年期の自我発達上の葛藤の程度を測定するものであるから、全体の場

合のA水準得点を基準変数とした場合の標準偏回帰係数を見ると幼児期の親イメージ得点が支配の場合には、家族関係得点の標準偏回帰係数は高いが、それ以外の親イメージにおいては、家族関係得点の標準偏回帰係数が低いこと、及び幼児期の親イメージ得点の支持と不安定の場合にはそれら自身の得点、交友関係得点、life change units得点において高い値が認められた。このことから、社会化理論が青年期の自我発達上の危機状態を説明できる理論としてとらえられた。つまり、幼児期からの親子関係のあり方が基盤となってその内容が青年期を迎えて交友関係へと展開し、その社会化の過程が青年期の自我発達上の危機状態と関連していることがとらえられた。

ところで全対象の場合の危機状態B水準得点の標準偏回帰係数を見ると、life change units得点が高い値を示していることがわかる。このことから、Meyer & Haggerty (1962) がいうように青年期の不適応状態には、ライフイベントが大きく影響を及ぼしており、青年期の自我発達上の危機状態に陥り、不適応反応(閉じこもりや身体症状)を示す青年にとっては精神内界における葛藤よりも現実外界からの影響度が強いことが明らかにされた。

また各群別に危機状態A水準得点の標準偏回帰係数を見ていくと、女子の場合、中学生時と高校生時一貫して交友関係得点の標準偏回帰係数が高いことがわかる。このことから、女子の場合、中学生時と高校生時を通して自我発達上の危機状態に対して交友関係のあり方が重要な要因であることがとらえられた。

#### (2)各尺度間の相関係数からとらえた社会化理論の検討

研究1と研究2の結果をもとに青年期の自我発達上の危機状態尺度以外の各尺度得点間の相関係数を算出し、その結果から青年期の自我発達上の危機状態に対する社会化理論の説明を検討したい。研究1の自我強度尺度得点は、他の3つの尺度得点とに有意な相関係数は認められなかった。また研究2のlife change units得点は、他の4つの尺度得点とに有意な相関係数は認められなかった。このことから、自我の強さの程度とライフイベントの有無との2要因は、幼児期から青年期までの親子関係のあり方や交友関係のあり方とは強い関連をもたないことが明らかにされた。そこでこの2要因を除いた各尺度間の関係をとらえてみた。幼児期の親イメージ得点は、Radke-Yarrow, Zahn-Waxler & Chapman (1983)の社会化理論にもとづいて、「支持」の場合の両親の合計得点とし、FIGURE 1に研究1と研究2の全対象の場合の4つの尺度得点間の

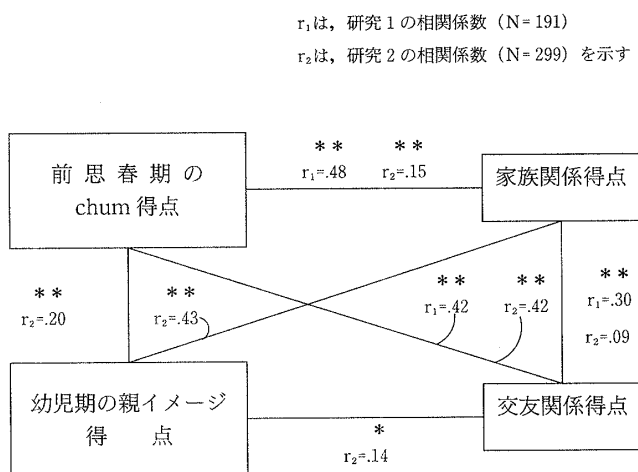


FIGURE 1 研究1と研究2の4尺度得点間の相関係数

幼児期の親イメージ得点は、支持の場合の父親に対してと母親に対しての合計得点とした。家族関係得点は、合計得点とした。

\*  $p < .05$       \*\*  $p < .01$

相関係数をまとめた。FIGURE 1の各尺度間の相関係数が高いことから、幼児期から前思春期、青年期へと経るにつれて自我の社会化が展開されるという社会化理論がうらづけられた。

### 要約と今後の課題

本研究の結果は、以下のとおりに要約された。(1)青年期の自我発達上の危機状態に対して、自我の強さの程度、前思春期のchumの有無、現在の交友関係のあり方、現在の家族関係のあり方の4要因の中で自我の強さの程度がもっとも影響を及ぼしていることが明らかにされた。(2)幼児期の親イメージ得点、life change units得点、前思春期のchum得点、現在の交友関係得点、現在の家族関係得点を予測変数とした重相関係数、及び標準偏回帰係数の結果と各尺度得点間の相関係数の結果から、青年期の自我発達上の危機状態に対して幼児期の親子関係が基盤となり青年期の交友関係が展開されるという社会化理論が説明できた。(3)青年期の不適応状態は、自我の強さの程度とともにライフイベントの影響が大きいことが明らかにされた。

しかしながら、本研究の問題点は多く残されている。たとえば、(1)青年期の自我発達上の危機状態尺度は、対人関係次元を中心とした自我発達尺度であり、道徳性、衝動の統制力、自我の防衛のあり方などの自我機能の発達も測定できるように尺度を今後、考案していくこと。(2)自我の強さの程度、ライフイベント、及び交友関係のあり方の間にどのような相互作用があつて

青年期の自我発達上の危機状態に陥るのかという点が明らかにされていない。(3)幼児期の親イメージや前思春期のchumの有無について回顧法を用いたが、回顧法の信頼性の問題が残されている。(4)本研究で用いた尺度が、各要因をとらえるためにふさわしい尺度であるのかどうかの検討がなされていないなどがあげられる。このようなことをふまえて、今後は社会化理論にもとづいて青年期の自我発達上の危機状態を規定する要因について検討していきたい。

### 引用文献

- Barron, F. 1953 An ego-strength scale which predicts response to psychotherapy. *Journal of Consulting Psychology*, 17, 327—333.
- Blos, P. 1962 *On adolescence: A psychoanalytic interpretation*. New York: Free Press. (野沢栄司(訳) 青年期の精神医学 誠信書房)
- Blyth, D. A., Hill, J. P., & Thiel, K. S. 1982 Early adolescents' significant others. *Journal of Youth and Adolescence*, 11, 425—450.
- Bracken, B. A. 1993 *Assessment of interpersonal relations*. Austin, TX: University of Texas Press.
- Brittain, C. U. 1963 Adolescent choices and parent-peer cross pressures. *American Sociological Review*, 28, 358—391.
- Coddington, R. D. 1972 The significance of life events as etiologic factors in the disease of children: I. A survey of professional workers. *Journal of Psychosomatic Research*, 16, 7—18.
- Cooper, C. R., & Lopez, S.A. 1985 Family and peer systems in early adolescence. *Journal of Early Adolescence*, 5, 9—21.
- Erikson, E. H. 1959 *Identity and the life cycle*. New York: International Universities Press. (小此木啓吾(訳編) 自我同一性 誠信書房)
- 福岡欣次・橋本 幸 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, 43, 185—193.
- 久田 満・千田茂博・箕口雅博 1989 学生用ソーシャル・サポート尺度作成の試み(1) 日本社会心理学会第30回大会発表論文集, 143—144.
- 上林靖子・中田洋二郎・藤井和子ら 1989 ライフイベント法による児童・思春期精神障害の成因に関

- する研究 その1 昭和63年度厚生省「精神・神経疾患研究委託費」研究報告書, 111—125.
- 工藤 力・西川正広 1983 孤独感に関する研究(1) 実験社会心理学研究, **22**, 99—108.
- Loevinger, J. 1976 *Ego development : Conceptions of theories*. San Francisco : Jossey Bass.
- Mannarino, A. P. 1976 Friendship patterns and altruistic behavior in preadolescent males. *Developmental Psychology*, **12**, 555—556.
- Meyer, R.K., & Haggerty, R.T. 1962 Streptococcal infections in families. *Pediatrics*, **29**, 539—549.
- 宮下一博 1991 青年期におけるナルシズム的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係 教育心理学研究, **39**, 455—460.
- 長尾 博 1989 青年期の自我発達上の危機状態尺度の作成の試み 教育心理学研究, **37**, 71—77.
- 長尾 博 1992 青年期の自我発達上の危機状態尺度の併存的妥当性の検討と危機状態の縦断的研究 カウンセリング研究, **25**, 105—111.
- 長尾 博 1993 青年期の自我発達上の危機状態に関する内容的妥当性の検討 活水論文集, **37**, 45—59.
- 長尾 博 1995 青年期の自我発達上の危機状態尺度に関する信頼性の検討 活水論文集, **38**, 49—57.
- 長尾 博 1996 青年期の自我発達上の危機状態に関する研究 自費出版
- 長尾 博 1997 前思春期女子の chum 形成が自我発達に及ぼす影響 教育心理学研究, **45**, 203—212.
- 小川捷之 1965 自我の強さの測定に関する研究 その1 東京教育大学教育学部紀要, **11**, 107—122.
- Olson, D. H., Portner, J., & Lavee, Y. 1985 *Family adaptability and cohesion evaluation scale*. Minnesota : University of Minnesota Press.
- Orlofsky, J. L., Marcia, J. E., & Lesser, I. M. 1973 Ego identity status and the intimacy vs. isolation crisis of young adulthood. *Journal of Personality and Social Psychology*, **27**, 211—219.
- Radke-Yarrow, M., Zahn-Waxler, C., & Chapman, M. 1983 Children's prosocial disposition and behavior. In Mussen, P. H. (Ed.) *Handbook of child psychology*. New York : Wiley.
- Reiter, L., & Strotzka, H. 1977 Der Begriff der Krise. *Psychiatria Clinica*, **10**, 7—26.
- 貞木隆司・樫野 潤・岡田弘司 1992 家族機能と精神的健康 心理臨床学研究, **10**, 74—79.
- Sullivan, H. S. 1953 *The interpersonal theory of psychiatry*. New York : W. W. Norton.
- 鈴木浩二 1985 日本における家族研究と家族療法 臨床精神医学, **14**, 65—70.
- 田端純一郎 1981 EIS-IIによる自我同一性の研究 日本教育心理学会第23回総会発表論文集, 820—821.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 譲 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21—28.

(1997.7.22 受稿, '98.9.19 受理)

## *Factors That Influence the Ego Developmental Crisis State in Adolescence*

HIROSHI NAGAO (DEPARTMENT OF LITERATURE, KWASSUI WOMEN'S COLLEGE) JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 1999, 47, 141—149

The present study investigated factors that influence the ego developmental crisis state (ECS) in adolescence. In Study 1, 191 junior and senior high school students and college students completed questionnaires assessing their ego developmental crisis state, ego strength, the existence of a chum in pre-adolescence, familial relations, and friendship. In Study 2, 299 junior and senior high school students completed questionnaires assessing the impact of life events and their parents' image in childhood, in addition to the above factors (with the exception of ego strength). The results showed that the degree of ego strength was the factor that most influenced the ego developmental crisis state. The results showing the importance of the infantile stage on the ego developmental crisis state supported Radke-Yarrow's socialization model (Radke-Yarrow et al., 1983). The impact of life events was also shown to be an influential factor in a maladjusted reaction to the ego developmental crisis state.

Key Words : ego developmental crisis state, influential factors, socialization model, adolescents